

風

『新壘』  
64-1号

神の在不在問ふべくこの秋のこころみ一枝の紫式部

残しゆく秋の風趣のこだはりを誰に預けむひと東の彩

荒れながら吹くゆゑ勞りともならず勤勞感謝の日の  
午後の風

壮年を超えて華やかなるべしと世の片隅に軀は置き  
思ふ

賤しまたけなしめられつつさだ過ぎしわれらのあはひ  
に吹くは人の風

秩序もたず這ひ「りゆく蔓草の方位と言ふも宙には  
かなむ

はぐらかし過ぎたかも知れぬ言葉ひとつ巨峰を前にど  
れほどのこと

さよならを言ひたげにまつはる秋の蚊を打ちはらひふ  
り払ひて闇

つむものすべて優しとふり向けば戻れぬほど雪しんし  
んと降る

みぞれ雪額を濡らし降るなればをどこをみなの別な  
くて優し

孤独の奢り

『新壑』3  
64-3号

任げ得ざるゆゑの直立白晔の意志を囲みて冬の陽は  
在り

窓近く顔冷えびえと目覚めたり未来までもみなし見  
のどごとく

点眼の後しばらくを瞑るなり死の前触れのやうな雪  
の闇

透りゆく咽喉に真みづの冷めたさや孤独の奢りとつきつ  
められて

遠く来て踏みあやまらざる道故に束縛よりも自由の  
悲惨

暮色

『新壑』4号

のびやすき爪尖らせて冬ごもるまがふかなこところど  
しとは

言葉ひとつ直接ならねど耳に止む身の転換をいま図ら  
ねば

佇ちつくし敢へて寂しさ言ふなれば冬の丘蒼然と暮色  
の兆し

ひとひらの雪の温かさ掌に享けて何を度しむほどの齡  
なる

部屋ごとの鏡に捉へらるる無表情いまのさきはひ顔度  
に充たぬか

鬱なる冬

『新壑』5号  
64-5号

踏みてゆくだらだら坂の凍れ雪弥生三月誰れの夕暮  
れ

三月の独りに耐ふる夜遠しつづく濫襖をひきずりなが  
ら

価値なきと氣付けば棄てにゆく物にはあらずたとへば  
鬱も

風向計無風の霜に回りゐてわれのひと生のかち回りに  
似る

冬ゆゑに言葉あたたかく伝へんとシクラメンの鉢かたは  
らに置く

今年の著莪

『新墾』  
64-6号

清貧と赤貧の別を説きながら徑に桜花を蹴散らしゆ  
くも

沈丁花おのづと香る方向に肩寄せ歩む今日の記憶に

降るたびに身震ふ著莪の花しろく雨はやさしき打擲  
にして

薔薇酒に酔うて奢りの貧しさや俯くあたりの床に月  
射す

花柄の傘をひらけばなんとなく身に明日のあること疑  
はず

歩調

『新壑』  
64-7号

誰からも見放されしやうな空の中蟻との歩調ととのへ  
るたり

蛇萁の熟れたる紅を跨ぎゆく野はひっそりと昼のただ  
中

ふり仰ぐ梢に花の見えずして山苜の木は銀白の清ら  
を零す

えいご

弱りゆく齡にあれば曖昧にてさしたる論の持ち合せ  
もなく

高層の立ち並ぶゆゑ瞳を上げて都会の旅にいたく疲  
るる

魂の球形

『新壑』  
64-8号

紫陽花の藍の一花に鎮めたるわが魂の或いは球形

ながらへて愁ひのほかは何を見む回転扉に吸はれゆく  
人

意味もなく生きるる意惨を照らす月ともにはな  
天と地の存在

若者の孤独の速度昂めつつ逆風の中の闇を突つきる

身ひとつを携へてゆく重たさは袋に詰められるトマトの  
完熟

夏の空

『新壑』  
64-9号

体重計に骸となりし蟻の量わが愚かさも量られて夏

放たれし風船の浮遊かぎりなく自在の不遜空に散ら  
ひて

暮れなづむ空にはほほ笑み投げかけて無傷のひと目のか  
すかな凱歌

持ち寄れる孤独と言ふも寂しくて鏡の中のみづからに  
過ふ

母の日を遅れて届きし薔薇ひと束鏡に抱けばすなは  
ち二束

八月の響

『新壘』  
64-10号

雨季すぎて速き酷暑に至りなばひとりへの愛朦昧に  
消す

太々と立つゆゑ冥き翳をおく向日葵の孤独見てしま  
ひたり

灼かれゆく八月の鬱いづぼんに立つ向日葵よりもなほ  
孤りなり

すこやかに生きゐる幸せ告げながらきしきし洗ふ父  
母の墓石

あさなさを冷えしタイルの廊を拭くひとりに還らな  
魂までも

酷暑の夏

『新壑』  
64-11号

襲ひくる酷暑の中の夏風邪にはやくも兆しくる午後  
の微熱

さしのぶる手に届かずして向日葵の花冠は鋭く拒否  
を装ふ

吹かれつつ定まらねままの身のすみか中流とふ意識消  
しがたく

みづみづと葡萄に宿せる魂のあるひは洩れて闇に霏す

死者との距離いまだ遠きにありながら珈琲の香ればか  
たはらのこと

十月の突風

『新壘』  
64-12号

幾重にも自立とふ語の空転や昼ながら衰ふるひる顔の  
花

言訳にもならぬ言訳くり返し十月の知恵突風に微塵  
なり

熟柿ひとつ皿に置かれてすでに晩秋死者との交信冷や  
やかに絶ゆ

気負ひなど持たぬ齡と言ふなかれ枯向日葵に燐寸摺  
る手が弾む

如何にして耐へるる念ひぞ池の面にわが投ず瘦身の紫  
紺色